

孫は子供より可愛いという。責任がないから、ただ可愛がればいい。孫もしつけのため時には厳しくせざるを得ない親より、いつも甘いじいちゃん、ばあちゃんにおねだりしやすい。私には2人の孫がいるが、彼らの笑顔は何にも優る癒しであり、まさに“じじ馬鹿”になって、孫との付き合いを楽しんでいる。

しかし、孫を見ていると、ふと思うことがある。彼らが社会の中心の世代になった時、勿論私はこの世にいないが、彼らが我々の世代にどのような思いを抱くだろうかと。

「地球の気候変動（温暖化）の対策が必要だったのに、勝手なことばかりして、その結果、地球は取り返しのつかない状態になってしまった。あなたたちは身勝手に無責任だった。」

じいちゃん達の世代は科学・技術が進歩し、経済が大きく発展した。移動手段、生活環境、社会インフラ、あらゆる分野で豊かさと快適性、スピードを求め、努力をして手に入れてきた。振り返れば達成感、満足感がある。それが面白かったし、楽しかった。

それに伴いエネルギーの使用量は飛躍的に拡大し、有限な化石燃料を好きなだけ貪り食った。確かに、先進国では、一人当たりのエネルギー消費量は19世紀の産業革命以前と比べれば、1000倍をはるかに超えている。そして、地球の温暖化という厄介な問題を引き起こしてしまった。

地球の温度が2度上昇すると、気候は激変し、人類にとって取り返しのつかない悲惨な状況となるらしい。既に産業革命期から地球の温度は1度上昇している。残された余地は1度しかない。温暖化対策については、97年の京都議定書ではまともならず、昨年のCOP21会議で、今世紀後半には温暖化ガスの排出と吸収を均衡させようとするパリ協定が採択された。

先進国同士が対立し、先進国と発展途上国の利害が背反するなかで、この協定は各国が批准し発効するだろうか。重要なことは国の方針ではなく、人類一人ひとりが、問題の深刻さを理解し、自らエネルギーの消費を減らそうという強い意志をもって活動することだろう。しかし、我々は一度知ってしまった豊かさ、便利さを捨てられるだろうか、あるいは新興国の人々が、他国のように豊かになりたいと思っっている限り、協定が発効しても、実効には大きな疑問が残る。

一部の科学者は、温暖化は既にノーリターンの域に達しているという。30年前に「マッドマックス」という映画があった。草木が枯れてしまった荒野や廃墟で、命をかけて、わずかのガソリンを奪い合う。いつか地球はあのような姿になるのだろうか。

あっ君、たまちゃん、ごめんね。じいちゃん達が悪かった。でも、今度の休みには君たちと遊ぶために買い換えた大きな車で、旅行して、遊園地にいて、思い切り遊ぼうね。そして、ほしい物があつたら、いつでもいいなさい。